



TITLE:

アメリカの大学図書館

AUTHOR(S):

稲葉, 宏雄

CITATION:

稲葉, 宏雄. アメリカの大学図書館. 静脩 1977, 13(2): 1-2

ISSUE DATE:

1977-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36752>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1977年3月

Vol. 13, No. 2

アメリカの大学図書館

教育学部助教授 稲葉宏雄

私は昭和50年10月中旬から一年間、現代のカリキュラム研究のため、文部省在外研究員としてアメリカ合衆国に滞在した。その主たる研究地はカリフォルニア大学ロサンゼルス校であったが、その研究期間のうち約2ヶ月はアメリカ東部地方で過ごし、主としてコロンビア大学ティチャーズ・カレッジに滞在した。従って、私のアメリカでの大学図書館についての体験は、殆どカリフォルニア大学とコロンビア大学に限られているわけである。しかし一方はアメリカの州立大学を、他方は私立大学を代表する大学であり、その両者での図書館についての体験は、アメリカの大学図書館の一般的な在り方を示しているといえるかも知れない。ここでは、私が最も多く利用したカリフォルニア大学の図書館についての体験とその感想を書いておきたい。

カリフォルニア大学の場合、中央図書館ともいうべきものとして University Research Library があり、これを中心として College Library 及びその他の記念図書館が存在している。図書館利用は、先ず University Research Library に登録して Library Card の交付を受けることから始まる。このカードがなければ、教官も学生も、又私のような visiting scholar も図書館を利用することはできない。本の借出の場合にも、文献調査依頼の場合にも、このカードに記入されている名前と Borrower Number が必要なのである。この

カードは大学のどの図書館でも有効なのであるが、私は University Research Library と Education and Psychology Library でしか利用する機会をもたなかった。

この二つの図書館についての第一の印象は、大学キャンパスの広さと相応する形での規模の大きさであった。専門的文献は殆ど Education and Psychology Library で用が足りたので、Research Library では、私はその二階にあった Orient Library を専ら利用した。ここには主として日本、中国、朝鮮の文献が集中的に集められており、日本の部門では人文科学に関する研究書、大学紀要、研究誌と共に「文芸春秋」「週刊朝日」から「朝日新聞」——但し一ヶ月遅れ——までがあつて、日本の情報をうるにはことかかなかった。私が主として利用した Education and Psychology Library の場合は、その大きさを別とすれば、図書館の建物や書架の配列に特別の工夫がなされているというのではなく、我々がなれしたしんでいるのと同じような開架方式であった。

この二つの図書館で最も印象深かったのは、図書館員の人的な豊富さとその多様なサービスであった。大学図書館は研究と教育に奉仕するものとしてあるという原則が貫かれており、多数の図書館員がいることによって、利用者に対して極わめてきめ細かなサービスと情報活動をすることが可能であるということである。東洋系の図書館員の

中には日本語を話す人もあり、私は常に親切なサービスを受けたということが出来る。又人的豊富さは、開館時間を利用者のために設定するという事を可能にしていた。Education and Psychology Library の場合、開館時間は月曜から木曜は午前8時から午後11時、金曜は午前8時から午後5時、土曜は午前9時から午後5時、日曜は午後1時から午後9時となっていた。これは現在の日本の大学図書館では考えられないことである。

その他、必要な項目についての文献はコンピューターを通じて即座に打ち出されてくるし、カリフォルニア大学にない文献については、直ちに他

の大学の図書館や一般の図書館に照会して、それを取り寄せてくれる等のサービスが心に残っている。私は利用しなかったが、Research Libraryに申しこんでおけば、多数の美術品、フランクリン自筆の自伝、ゲーテンベルヒ印刷機による最初の聖書、様々な庭園で有名なハンチントン・ライブラリーへも、大学の自動車で送迎してくれる等のサービスがなされていた。

図書館に関しての思い出、少々うらやましい思いをもって帰国したというのが、いつわりのない感想である。

フランス社会思想史展について

＜昨年11月8日より10日まで、附属図書館陳列室において、本学人文科学研究所の協力により、標記展示会が開催されたが、この機会に今回の「フランス社会思想史展」について、その趣旨の説明を人文科学研究所にお願いした。＞

本学では各部局、各研究室において社会思想史の研究が進められているが、それらのうち人文科学研究所では、西洋部を中心として、18、19世紀のフランス社会思想についての共同研究が約30年近く実施されてきた。この共同研究は本学附属図書館をはじめ、各部局所蔵の多くの文献資料を利用しつつ行われたが、とくに附属図書館所蔵の

「フランス百科全書」、「サンシモン、フーリエ関係文献」、文学部所蔵の「ルソー全集」、「フランス革命文献」、経済学部所蔵の「プルードン全集」などの存在は、研究遂行上きわめて貴重なものであった。

今回の展示は、この共同研究に関連した文献の一端を示すとともに、共同研究の推移を回顧することを目的とした。

桑原武夫教授、つづいて河野健二教授の主宰するこの共同研究は現在も進行中であり、近く第二帝政期に関する研究報告が刊行される予定である。

人文科学研究所

プリンストン大学出版部寄託図書目録 第15回（1973 後期）

前回＜1975年 Vol. 12, No. 1 静脩参照＞にひきつづき、1973年後期にプリンストン大学出版部から、寄託された図書を紹介します。利用を

希望される方は、書名の最後の()内の記号＜請求記号＞で、閲覧貸付掛＜2階カウンター＞へ請求してください。